第 494 号
2024 年 9 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第 516回（2024 年 9 月 12 日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：9 人
時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『モノクロの街の夜明けに』 ルータ・セペティス／作，野沢 佳織／訳 岩波書店

9月の読書会では、『モノクロの街の夜明けに』を読みました。1989年に実際に起こったルーマニア革命を描く歴史フィクションです。独裁政権により、家庭内は盗聴され、街には密告者があふれているルーマニア。抑圧された生活のなか、自由を求めて革命へ突き進む様子が、17 歳の少年クリスティアンを主人公に描かれています。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

●当時は、チャウシェスクの悪い行いだけが報道されていて、革命の裏側で起こっていたことがわからなかった。誰を信じたらいいのかわからない監視社会。これが、そんなに昔の出来事ではないことが衝撃。自由になったからといって、モノクロだった街に急に色がつくようになるのか。みんな傷を抱えながら生きていくのでは。物語ではあるが、本として記録に残すことは大切。知らなかったことの裏側を知ることができた。

●恋する気持ちにも疑いを持たなくてはいけない生活。自分だったら正気を保っていられただろうか。おじいさんの存在はとても重要。政権は、教育によって子どもたちを洗脳しており、本当に恐ろしい。最後のシーンは主人公が過去に別れを告げる結果となるのか不安が残った。歴史に切れ目はなく、今に続いている。ニュースなどの数字では伝わってこない、一人一人の人生を想像することの大切さを感じた。

●当時のことはベルリンの壁の崩壊のほうが記憶に残っている。この本を読んで、自分は何も知らなかったということを知ることができた。お母さんは誰のために密告していたのか。社会主義の目指すところはどこなのか。秘密警察の報告書は、人間を人間と思っていない。そして、革命のあともラケットハンドは生きている。受け入れがたい現実。タイトルのとおり、モノクロから夜明けへ向かって欲しい。

●途中でやめることができなくて、一気に読んだ。当時のルーマニアの状態を知らなかった。ドラキュラとコマネチの国というイメージ。コマネチの亡命をなぜ？と思っていたが、この本を読んでなるほどと思った。帯に書いてある言葉にハッとさせられた。こんな社会はあってはいけないが、今も世界中のどこかにあるかもしれない。世界で助けなくてはいけないと思うが、難しいとも思う。

●お母さんがかわいそう。薬が欲しい、子どもを守りたいと思って密告者になったとしたら、やりきれない。子どもやおじいちゃんとは違い、生活基盤である家を守りたかったのだろう。人を孤立させ、バラバラにする独裁政治。みんなで話し合い、団結できていたら違う革命になったかも。子どもたちにも読んで欲しい本。世界を見る目が変わる。今、戦争をしている国にも、自分と同世代の若者がいることを知ってほしい。

●当時、自分が見ようとしなかった真実を突き付けられた。おぞましい密告社会。姉のチチもクリスティアンも大切な人を守りたいという気持ちを利用された。ルーマニアでは革命の後も社会主義が残り、情報の開示に15年もかかった。1989年は天安門事件もあり、今はウクライナやガザで争いが続いている。次の世代、子どもたちが受け継ぐ世界が平和であることを祈るばかりだ。

●おじいちゃんが死んだとき、チチが密告者と知ったときなど本当に切なかった。ただ、クリスティアンはいつもどこか冷静だった。自分のクローゼットやノートがあったからか。抑圧された社会でも、ビデオやラジオから国民は情報を得ていた。広い世界を知ることは、今の生活を疑うことにつながる。クリスティアンの手紙が、アメリカに届き、ラジオを通して世界に届いたことにホッとした。

次回 10 月 10 日(木)10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室
📖『ナイチンゲールが歌ってる』 ルーマー・ゴッデン／作，脇 明子／訳，網中 いづる／絵 岩波書店
※申込み・参加費は不要です。